

元結の新樂府——「系樂府十二首」と「春陵行」

加藤 敏

千葉大学教育学部

A Study on Yuan Jie (元結)'s Xin Yue Fu (新樂府), "Xi Yue Fu (系樂府)" and "Chongling Xing (春陵行)"

KATO Satoshi

Faculty of Education, Chiba University, Japan

唐代の詩人元結の諷諭の文学について、とくに新樂府「系樂府十二首」および「春陵行」を中心にして、中唐の白居易と比較しつつその特色を明らかにした。

キーワード：元結 (Yuan Jie) 系樂府 (Xi Yue Fu) 春陵行 (Chong Ling Xing) 白居易 (Bai Ju Yi)

一、はじめに

元結の文学の特色について考察する。

二、「系樂府十二首」——歎怨への着目

これまでの元結研究、唐代文学史において、元結の諷諭の文学は中唐期の新樂府運動の先蹤と位置づけられ、また元結と白居易の影響関係も指摘されている。例えば、既に孫望氏は、元結の詩歌に対する考え方と実践とが白居易に影響を与えなかったとは言えないとして、次のように述べている。

元結竭力提倡的、实质上是饱含着革新意义的『复古』，其指导思想无疑是进步的，特别在唐代古文运动中，他的先导之功，是不应把他低估的。章学诚说：『人谓六朝绮靡，昌黎始回八代之衰，不知五十年前，早有河南元氏为古学于举世不为之日也。元亦豪杰也哉！』(《元次山集书后》) 同样，他对诗歌的见解和实践，也不能说对白居易没有影响^{〔註2〕}。

また、陶文鵬氏も、次のように、元結が元稹、白居易らの新樂府を支えた理論を準備したことを指摘している。

盛唐から中唐にかけて顕著となる文学の特色を合理性の追求ととらえた鈴木修次氏は、「理論を先行させて文学を展開させるという傾向、別にいうならば、理にあわせて作品を作るという傾向は、盛唐と中唐の中立ちをする元結(七一九—七七二)あたりから強くなり、以後、中唐の文学者に継承されてゆくのである。」と述べ、また「中唐文学に示された合理の追求意識は、元結に始まるとわたくしは考える。」とも言い、「元結を唐代における文学の合理性追求の嚆矢であるとした^{〔註1〕}」。

鈴木氏のこの指摘は中唐文学のみならず元結の文学を捉える視点を呈示している。元結の「系樂府十二首」をはじめとする諷諭の作品は、確かに『毛詩』大序、そして漢代の文学観を継承し、理論を先行させて制作されたものであったが、彼の文学の特色はそのことにあるのではない。鈴木氏の指摘を手がかりに、理論を先行させて文学を制作するに至る過程、そしてその営みの意味を問い、表現者の姿を浮かび上がらせることによって、初めてその諷諭の文学の全体がとらえられるであろう。

本稿では、「系樂府十二首」および「春陵行」を取り上げて、新樂府の視点から

但在当时，他的过激的文学思想，却有一定的针对性和积极意义，而且直接启发了白居易、元稹倡导新乐府诗歌的理论主张，并为韩愈、柳宗元进一步把“古文运动”推向高潮，做了理论上的准备。^(注3)

元結と白居易は皮相的には同一の文学観を有しており、両者の関係を想定することは可能であろう。しかし一方で、すでに小川環樹氏は別の視点を提示している。

新樂府は作者自身の言葉によれば、詩によつて人民の苦痛をうったえ、また政治の批判をこころみることが目的であつた。その角度から見ると、白居易以前に張籍と王建らの作品があり、張王樂府と呼ばれ、政治への風刺を含んだものであつた。この系列は顧況元結さらには杜甫までさかのぼることができる。それは盛唐末年から中唐初期へかけて、鋭敏な詩人達の共同の感覚から、つぎつぎに生まれたのであり、決して白居易一人のあたらしい試みではない。^(注4)

新樂府に対する意識は時代の共通の感覚であつたとする小川氏の指摘は両者の関係の把握に慎重さを求めるものでもあろう。

郭茂倩『樂府詩集』は元結の新樂府として「補樂歌十首」「系樂府十二首」の二十二首を載せている。

この「補樂歌十首」「系樂府十二首」は、既に指摘されているように『毛詩』大序及び漢代の文学観に基づいて制作されている。「系樂府十二首」序には言う。

天宝辛未中、元子将前世嘗可称歎者、為詩十二篇、為引其義以名之、総命曰系樂府。古人詠歌不尽其情声者、化金石以尽之。其歎怨甚耶戲。尽歎怨之声者、可以上感於上、下化於下。故元子系之。

天宝辛未中、元子前世の嘗に称歎すべき者を將て、詩十二篇を為り、為に其の義を引きて以て之に名づけ、総て命けて系樂府と曰ふ。古人は詠歌して其の情声を尽くさずんば、金石に化して以て之を尽くす。其の歎怨甚しきかな。歎怨の声を尽くす者は、以て上は上を感じしめ、下は下を化すべし。故に元子之を系ぐ。

この序の文学観は『毛詩』大序に示された文学観にあやかったものである。

詩者志之所之也。在心為志、發言為詩。情動於中、而形於言。言之不足、故嗟歎之。嗟歎之不足、故永歌之。永歌之不足、不知手之舞之、足之蹈之也。情發於声、声成文、謂之音。治世之音、安以樂。其政和。乱世之音、怨以怒。其政乖。亡国之音、哀以思。其民困。故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩。先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗。故詩有六義焉。……上以風化下、下以風刺上。主文而譏諫、言之者無罪、聞之者足以戒。故曰風。……

詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す。情中に動きて、言に形る。之を言ひて足らず、故に之を嗟歎す。之を嗟歎して足らず、故に之を永歌す。之を永歌して足らず、手の之を舞ひ、足の之を蹈むを知らざるなり。情は声に発し、声は文を成す、之を音と謂ふ。治世の音は、安んじて以て樂しむ。其の政和す。乱世の音は、怨み以て怒る。其の政乖く。亡国の音は、哀しみ以て思ふ。其の民困しむ。故に得失を正し、天地を動かし、鬼神を感じしむるは、詩よりも近きは莫し。先王是を以て夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美にし、風俗を移す。故に詩に六義有り。……上は風を以て下を化し、下は風を以て上を刺る。文を主として譏諫し、之を言ふ者罪無く、之を聞く者以て戒しむるに足る。故に風と曰ふ。……

孔穎達が「在己為情、情動為志。情志一也。(己に在るを情と為し、情動きて志と為る。情と志とは一なり)」（『春秋左氏伝正義』）と述べるように、唐代においてはこの文学観における志と情とは同一と解釈され、詩は志と情、すなわち心中のさまざまな思いや情念を表出するものと認識されている。「詩は人間の感情の純粹な発露」等と解釈される所以である。^(注5)

聶文郁氏は、この「系樂府」が白居易の新樂府と同様であつたとして、次のように述べる。

在实际上元結所说的系乐府是一样的。我们说新乐府的写作，是陈子昂、李白、杜甫等人就已开始了的，但他们还没提及新乐府之名。到白居易、元稹才把乐府的写作正式提出来加以倡导，并发展到高峰，元结是陈、李、杜与元、白之间一个为新乐府斩荆劈棘的重要人物。^(注6)

白居易が元結と同様、『毛詩』大序の文学観に基づいて新樂府を制作したことは確かである。しかし、「系樂府十二首」の序において注目されるのは、詩は歎びや哀怨の情を尽くすものであってはじめて、為政者を感化し人民を教化することができる、すなわち社会的機能を果たすことができることである。

唐・駱賓王の「上吏部裴侍郎書」（『駱賓王文集』卷七）は「夫怨于心者、哀声可以応木石、感于情者、至性可以通神明。（夫れ心に怨む者は、哀声以て木石に応ずべく、情に感ずる者は、至性以て神明に通ずべし。）」^{（注7）}と言ひ、怨みに着目している。また王昌齡の『詩格』は「娛樂哀怨、皆張于意而処于身、然後馳思、深得其情。（娛樂哀怨、皆意に張りて身に処り、然る後思ひを馳すること、深く其の情を得たり。）」と、樂しさや哀怨の情の大切さを説いている。しかし「歎怨の声を尽くす」のように歎びや哀怨の極限の表出を言う者は無いようである。

この歎びや哀怨の情の表出を重視する意識は、「系樂府十二首」の表現にどのようにに反映しているのであろうか。晩唐の皮日休の作と比較しつつその表現の特色を明らかにする。

皮日休は「系樂府十二首」にあやかつて、「正樂府十篇」^{（注7）}を制作した。その序には次のように言う。

樂府蓋古聖王采天下之詩、欲以知国之利病、民之休戚者也。得之者、命司樂氏入之於墳簞、和之以管籥、詩之美也、聞之足以勸乎功、詩之刺也、聞之足以戒乎政。故周礼太師之職、掌教六詩、小師之職、掌諷誦詩。由是觀之、樂府之道大矣。今之所謂樂府者、唯以魏晉之修麗、陳梁之浮艷、謂之樂府詩、真不然矣。故嘗有可悲可懼者、時宣於詠歌、總十篇、故命曰正樂府詩。

樂府は蓋し古の聖王天下の詩を采りて、以て国の利病、民の休戚を知らんと欲する者なり。之を得れば、司樂氏に命じて之を墳簞に入れ、之に和するに管籥を以てす。詩の美むるや、之を聞きて以て功を勸むるに足り、詩の刺るや、之を聞きて以て政を戒むるに足る。故に周礼に太師の職は、六詩を教ふるを掌り、小師の職は、詩を諷誦するを掌る。是に由りて之を觀れば、樂府の道大なり。今の所謂樂府は、唯だ魏晉の修麗、陳梁の浮艷を以て、之を樂府詩と謂へば、真に然らず。故嘗て悲しむべく懼るべき者有り、時に詠歌に宣す、總て十篇、故に命けて正樂府詩と曰ふ。

増田清秀氏は、樂府はすなわち『詩經』であり、樂府における美刺褒貶は『詩經』のものと同一であるとする視点から「正樂府」が制作されたこと、魏晉以来の樂府を斥け、また批判的精神が強烈で露骨であるところに特色があることを指摘している。^{（注8）}元結も樂府が『詩經』の美刺褒貶の精神を嗣ぐものであるとしていることは明らかであるが、やはりその特色は、樂府が為政者のものであることより、歎怨を極めた表現によつて為政者を感かすことが強調されているところにあると言ふことができよう。皮日休は「聖王の精神の祖述者たるを自任し」、^{（注9）}為政者に正しい樂府を提供しようとし、元結は為政者を感かそうとしたのである。表現者の視点は微妙に異なっている。具体的な作品を見てみよう。「系樂府十二首」其六「貧婦詞」と「正樂府十篇」其「一」卒妻怨」を取り上げる。

01 誰知苦貧夫	誰か知らん 貧に苦しむ夫
家有愁怨妻	家に愁怨の妻有るを
請君聽其詞	請ふ君其の詞を聽かんことを
能不為酸悽	能く酸悽を為さざらんや
05 所憐抱中兒	憐む所の抱中の兒は
不如山下甕	山下の甕にも如かず
空念庭前地	空しく念ふ 庭前の地の
化為人吏蹊	化して人吏の蹊と為るを
出門望山沢	門を出でて山沢を望み
10 回頭心復迷	頭を回らせば 心復た迷ふ
何時見府主	何れの時か府主に見え
長跪向之啼	長跪して之に向かひて啼かん
	（貧婦詞）

元結は、貧窮に苦しむ夫の妻のことばを語る。第三、四句で、読者にこの妻のことばを聴いてほしいと呼びかけ、家に残された妻の悲痛な哀怨の声を聞けば、痛み悲しまないわけにはいかないという。この句は、以下に語られる妻のことばにすさまじい悲哀が表出されることを暗示している。第十一、十二句「何時見府主、長跪向之啼（何れの時か府主に見え、長跪して之に向かひて啼かん）」という表現とともに、読者は、夫を徴発され、幼子と二人残された貧しい妻の悲哀を共有する。こ

の作品では、語り手である元子が自身の哀怨を直接に訴えているのではなく、妻の極限の哀怨を語っているのである。

01 河湟戍卒去 河湟 戍卒去り

一半多不迴 一半 多くは迴らず

家有半菽食 家に半菽の食有るのみ

身為一囊灰 身は一囊の灰と為る

05 官吏按其籍 官吏 其籍を按じ

伍中斥其妻 伍中 其の妻を斥く

処処魯人壑 処処 魯人の壑あり

家家杞婦哀 家家 杞婦の哀あり

少者任所婦 少き者は婦る所に任ずも

10 老者無所携 老ゆる者は携ふる所無し

況当札瘥年 況や札瘥の年に当たり

米粒如瓊瑰 米粒 瓊瑰のごときをや

累累作餓殍 累累として餓殍を作す

見之心若摧 之を見れば心は摧くるがごとし

15 其夫死鋒刃 其の夫は鋒刃に死し

其室委塵埃 其の室は塵埃に委ぬ

其命即用矣 其の命 即ち用ふ

其賞安在哉 其の賞 安くにか在らんや

豈無黔敖恩 豈に黔敖の恩の

20 救此窮餓骸 此の窮餓の骸を救ふ無からんや

誰知白屋士 誰か知らん 白屋の士

念此翻歎歎 此を念ひて翻て歎歎たるを (卒妻怨)

「卒妻怨」は、元結と同様、出征している夫と家に残された妻という設定で展開する。ただ、皮目休が描くのは、辺境で死亡した兵士の妻たちであり、いわば元結の作品に描かれた妻のその後の姿と言ってよい。第七句の「魯人壑」とは、春秋時代、魯が戦いに敗れたとき、亡くなった兵士たちの妻が髪を束ねただけで喪に服し

たという『春秋左氏伝』襄公四年の話をうい、第八句「杞婦哀」とは、春秋時代、斉の杞梁の妻が、戦で亡くなった夫の死を悼み十日にわたって哭し、城が崩れたという話をふまえる。どの家からも髪をたばねただけで喪に服する妻たちの哭声があることを言う。第十一句「札瘥年」とは疫病流行の年。米の価格が暴騰し、皆飢えて死んでゆくほかはない、悲惨な状況を描く。詩は、戦いに殉じたのに報償も与えず、わずかの恵みも施さず、人々を見殺しにしてゆく為政者への怒りを述べて結ばれる。増田氏が指摘するように批判的精神は露骨で強烈である。ところが元結の作に比して妻たちの悲惨な姿が生き生きと立ち上がってこない。彼女らの哭声は、状況を客観的に描写する表現のなかに埋没してしまっているものであり、白屋の士としての表現者の怨みも批判の語りの中にはめ込まれたようである。一方、元結の作は、一人の妻の「愁怨」が強く際立っている。

元結の作品には、「系楽府十二首」以外にも、この歎びや哀怨を極めた表現、あるいはそれを極める者に注目した表現が見られる。例えば「劉侍御月夜讌会」詩には次のようにある。

01 我従蒼梧来 我 蒼梧より来り

将耕旧山田 将に旧山田を耕さんとす

踟躕為故人 踟躕するは故人の為なり

且復停帰船 且く復た帰船を停め

05 日夕得相従 日夕 相従ふを得

転覚和楽全 転た和楽の全き覚ゆ

愚愛涼風来 愚 涼風の来るを愛し

明月正満天 明月 正に天に満つ

河漢望不見 河漢 望めども見えず

10 幾星猶粲然 幾星 猶ほ粲然たり

中夜興欲酣 中夜 興酣ならんと欲し

改坐臨清川 改め坐して清川に臨む

未醉恐天旦 未だ酔はず 天の旦なるを恐れ

更歌促繁弦 更に歌ひて繁弦を促す

15 歛娛不可逢 歛娛 逢ふべからず

請君莫言旋 請ふ君 言に旋る莫れ

この詩は友人の劉湾と別れる夜、一時の歓楽を尽くすことを言う。第七句からは、あたりの情景を時間の経過とともに描く。夕方になり、涼風が吹き、やがて明月の光が空に満ち、天の川も見えず、いくつかの星が輝く。清らかな世界が提示されるのである。元結は、この歓びや楽しさにめぐり逢うことはできない、と言いつ、楽しみを極め尽くそうとしており、「改坐」「更歌」といった表現がその志向をよく表している。

また、道州刺史にあった頃の作である「石魚上作」は、湖中にある魚に似た怪石の上で酒を飲むことをうたい、その世界のうちにある歓びを表出している。

01 吾愛石魚湖 吾は愛す 石魚湖

石魚在湖裏 石魚 湖の裏に在り

魚背有酒樽 魚の背に酒樽有り

繞魚是湖水 魚を繞るは是れ湖水

05 兒童作小舫 兒童 小舫を作り

載酒勝一杯 酒を載すること一杯に勝ふ

座中令酒舫 座中 酒舫をして

空去復滿来 空にして去り復た満たして来らしむ

湖岸多欹石 湖岸に欹石多く

10 石下流寒泉 石下に寒泉流る

醉中一盃漱 醉中 一たび盃漱すれば

快意無比焉 快意 焉に比する無し

金玉吾不須 金玉 吾は須らず

軒冕吾不愛 軒冕 吾は愛せず

15 且欲坐湖畔 且く湖畔に坐し

石魚長相對 石魚と長へに相對せんと欲す

石魚湖と名付けた湖があり、その中に魚に似た石がある。元結は兒童に酒を運ばせて、石魚の背のくぼみに満たし、友人たちと酔うのである。石魚の下には冷たい

水が流れ、酔えばそれを掬って飲む。「快意無比焉（快意焉に比する無し）」の句が、その極限の歓びを直截に表現している。

歓びや哀怨の情への着目は、また撰詩の営みにもはつきりと窺うことができる。彼の撰による『篋中集』は、不遇な詩人達の詩二十七首を集めた小集であるが、採られている詩の多くは、哀怨の感情が痛々しいまでに吐露されている。今、『篋中集』に載せる王季友「寄韋子春」詩を見てみよう。

01 出山秋雲曙 山を出づれば秋雲曙け

山木已再春 山木 已に再び春なり

食我山中藥 我が山中の藥を食ふも

不憶山中人 山中の人を憶はざらん

05 山中誰余密 山中 誰か余と密なる

白髮惟相親 白髮 惟だ相親しむ

雀鼠晝夜無 雀鼠 晝夜無し

知我廚廩貧 我が廚廩の貧しきを知ればなり

依依北舍松 依依たり 北舍の松

10 不厭吾南鄰 吾が南鄰するを厭はず

有情尽棄捐 有情 尽く棄捐し

土石為同身 土石を同身と為す

これとほとんど同一の作品が殷璠撰『河岳英靈集』卷上に「山中贈秘書山兄」詩として採られている。

01 出山秘芸署 山を出でて秘芸の署にあり

山木已再春 山木 已に再び春なり

食我山中藥 我が山中の藥を食ふも

不憶山中人 山中の人を憶はざらん

05 山中誰余密 山中 誰か余と密なる

白髮日相親 白髮 日び相親しむ

雀鼠晝夜無 雀鼠 晝夜無し

知我廚廩貧 我が廚廩の貧しきを知ればなり
有情尽棄捐 有情 尽く棄捐し

10 土石為同身 土石を同身と為す

依依舍北松 依依たり 舍北の松

不厭吾南鄰 吾が南鄰するを厭はず

夫子質千尋 夫子 質は千尋にして

天沢枝葉新 天沢 枝葉新たなり

15 今以不材寿 今不材の寿を以て

非智免斧斤 智に非ざれば斧斤を免る

『四庫全書』集部、『篋中集』の提要は、「即七人作、見于他集者、亦不及此集之精善。蓋汰取精華、百中存一、特不欲居刊雅之名、故託言篋中所有僅此云爾。其沈千運寄秘書十四兄一首、較河岳英靈集所載、顛倒一聯、又少後四句、亦小有異同、而均以此本為勝。疑結亦頗有所点定。（即ち七人の作、他の集に見ゆる者は、亦た此の集の精善なるに及ばず。蓋し精華を汰取し、百中に一を存するも、特だ刊雅の名に居らんと欲せず、故に託言して篋中に有る所は僅かに此れのみと爾云ふのみ。其の沈千運の秘書十四兄に寄するの一首は、河岳英靈集に載する所に較ぶれば、一聯を顛倒し、又後四句少く、亦た小しく異同有り、而して均しく此の本を以て勝れりと為す。疑ふらくは結亦た頗る点定する所有るか」と述べ、元結が沈千運を始めとする詩人たちの小集を編むに際し、詩歌の綿密な選択を行っていたことを推測し、さらにここに挙げた二首を例証として、作品に周到に手を入れていた可能性を指摘している。

提要が指摘するように、両作品は、第八句までは同一で、『篋中集』の第九・十句（依依北舍松、不厭吾南鄰）、第十一・十二句（依依北舍松、不厭吾南鄰）が、『河岳英靈集』では入れ替わり、かつ第十三句以降の四句が加えられている。

この両作品を比較すると、表現の位相が全く異なることに気付く。

『河岳英靈集』の「山中贈秘書山兄」詩は、先ず秘書山兄が山を出、今、秘芸の署、すなわち秘書省にあり、山中にはまた春が訪れたことを言う。「秘芸署」は、他に例を見ない表現で、王克讓氏は、未詳として『唐詩紀事』・『全唐詩』の「秋雲曙」をよしとする。一方傅璇琮氏は、唐代、秘書省は芸署と呼ばれていたとして、秘芸

署をよしとする。ここでは傅璇琮氏の説に従う。第三、四句は、相手に対する問いかけである。第五句から第十句までは、山中における自らについて語る部分である。山中でひたすら老いゆく自らの姿、雀や鼠すらいない極貧の様子、そして様々な思いを捨て去り、土石と化した心が描き出されてゆく。それは「山中の人のことなど心にかけないであろう」という呼びかけに対応している。「夫子質千尋、天沢枝葉新（夫子質は千尋にして、天沢枝葉新たなり）」の「夫子」は、王克讓氏が「夫子、謂舍北松。」と注するように、直接には離れがたくまた慕わしい舍北の松に対する呼びかけなのであるが、同時に朝廷の秘書山兄の姿に重ねられてゆく。そして朝廷で恩沢に浴している秘書山兄の姿に不材の自らを対比させて詠いおさめるのである。他者に贈るということを意識した作品である。

一方、『篋中集』の作は、「有情尽棄捐、土石為同身（有情尽く棄捐し、土石を同身と為す）」（第十一句、十二句）と強い表現で言い切るのである。この詩では北舍の松は韋子春ではなく、自らの象徴に変容している。詩の表出から他者の姿が消えてしまい、孤高の精神を保ちつつ、あらゆる感情を捨て去って生きる姿が浮かび上がってくる。その背後には、深い哀怨が広がっており、他者に贈るという意図よりも、自らを表出することが際立ってくるのである。

この例は『篋中集』の編者としての文学的な感性をよく物語るものであろう。伊藤正文氏は、「詩においては内容を重視すべきで、声律などの形式美にとらわれることは、意志及び感情の自由な発露を妨げ、かえって詩の本質を見失わせることになる」と、彼は考える。（元結は「情性を吟詠」することには反対しない。……）。この点、元結はやはり唐代の文人である。と述べる。氏の指摘をさらに進め、元結の文学の底流には歓びや怨み、哀しみという歓怨の情を極めて表出しようとする強い志向があると言いうことができるだろう。「系楽府十二首」においては、歓怨の情を極めて為政者を感じることが意図されているのである。

さらに、拙論において明らかにしたように、「系楽府十二首」には、十二首の作品が天子を感動させて嘉納され、天子との幸福な邂逅を願う思いがこめられている。自らを『詩経』の文学観の構造のうちに於いて表出することで、いわば自己実現をはかったのが「系楽府十二首」であり、新楽府は、商余山に閉塞状況に置かれた元結によって選り取られた様式なのであって、「系楽府十二首」は、『毛詩』大序の文学観と自らの自己実現への情動という二重の構造を持つ作品なのであった。

『毛詩』大序の文学觀を明確に引き継いだ構造を持つ新樂府が自己表出の器として機能するには、樂府に対する絶対の信頼、樂府が社会的に機能しうるという確信がなければならぬ。これもすでに拙稿で論じたが、元結の樂府に対する確固たる信頼、確信に基づいた文学觀の誕生には元德秀にかかわるある出来事が大きく与かっていたと考えられる。

元結が開元二十三年（七三五）、十七歳の時、魯山県令の族兄元德秀に師事し、同年、玄宗は洛陽五鳳樓に近隣の県令・刺史を召集し、各地の声楽を競わせるということがあった。

玄宗在東洛、大酺於五鳳樓下。命三百里内県令刺史、率其声楽来赴闕者、或謂令較其勝負而賞罰焉。時河南郡主命樂工数百人於車上、皆衣以錦綉、服廂之牛、被以虎皮、及為犀象形狀。觀者駭目。時元魯山遣樂工数十人、聯袂歌于蔦。于蔦、魯山之文也。玄宗聞而異之。徵其詞、乃歎曰、賢人之言也。其後上謂宰臣曰、河内之人、其在塗炭乎。促命徵還、授散秩。

（玄宗東洛に在り、大いに五鳳樓下に酺す。三百里内の県令刺史に命じ、其の声楽を率ゐりて闕に赴かしむれば、或ひと謂へらく、其の勝負を較せしめて賞罰せんとす、と。時に河南郡主命樂工数百人を車上に命じ、皆衣るに錦綉を以てせしめ、服廂の牛は、被るに虎皮を以てし、及び犀象の形狀を為す。觀る者目を駭かす。時に元魯山は樂工数十人をして、袂を聯ねて于蔦を歌はしむ。于蔦は、魯山の文なり。玄宗聞きて之を異とす。其の詞を徵し、乃ち歎じて曰はく、賢人の言なり、と。其の後上宰臣に謂ひて曰はく、河内の人、其れ塗炭に在るか、と。促命して徵還せしめ、散秩を授く。）

五鳳樓下に至った三百里内の刺史、県令たちは、おそらく元德秀ただ一人を除いて、このたびの集いが祝宴の余興の歌競べであると理解していた。^(注16)しかし元德秀のみは、『毛詩』大序の文学觀をもってこの場に臨み、「于蔦（于）」^(注17)を披露した。「于蔦（于）」は散逸しているが、懷州（蔦）は懷州の古名）の人々の苦しみを歌ったものと推測される。玄宗は「于蔦（于）」に感かされ、嘉納し、懷州刺史を散官とした。「于蔦（于）」という樂府が『毛詩』大序の文学觀の位相において機能したのである。少なくともこの出来事を採録した者は、そのように理解したに相違ない。

後の白居易らの新樂府の淵源は、正確に言えば、元結ではなく、元德秀の「于蔦（于）」であったとしてよいであろう。

元德秀に師事し始めた元結が「于蔦（于）」の一件から、樂府が社会的に機能するものであるという確信を持ったことは十分に考えられる。この出来事がなければ「系樂府十二首」は、成立しなかったと言っても過言ではないであろう。

三、「春陵行」——漫叟と采詩

元結の新樂府「春陵行」が、「奏免科率状」と相補完する内容を持ち、道州の窮状を伝え、税の科率の減免を願って制作されたものとして読めることは拙論で明らかにした。^(注18)それとともにこの作品には、あるべき刺史の理念と道州刺史としての自らの判断が天子に嘉納されることへの願望も込められている。

「春陵行」序は「癸卯歲、漫叟授道州刺史。……（癸卯の歲、漫叟道州刺史を授けらる。……）」と、「元結」「臣某」等ではなく、漫叟の語をもつて始まっている。この作品は元結自身ではなく、語り手である漫叟の視点から制作されているのである。その序の末に「故作春陵行以達下情（故に春陵行を作りて以て下情を達す）」とあるのは、漫叟が「春陵行」を制作し、下情を達するというのであり、詩の最後の二句「何人采国風、吾欲献此辞（何人か国風を采る、吾此の辞を献ぜんと欲す）」も、漫叟が采詩の官に対して「春陵行」を献上しようとしていると解釈される。

漫叟とは「官僚世界に対峙し、放縦でなにもにも拘束されない『荒浪なる者』^(注19)という意味をこめた号」であり、ここでは体制の外にある刺史という表現者の意識がこめられている。「春陵行」冒頭に言う。

軍国多所需	軍国	需つ所多し
切責在有司	切責	有司に在り
有司臨郡県	有司	郡県に臨み
刑法竟欲施	刑法	竟に施さんと欲す

軍国は需要が多く、その供給の責任は官吏にあり、官吏は郡県に臨むと、ついには刑法を加えてまで軍国の需要を満たそうとする。ここに語られるのは民生を憂えることを知らぬ官吏である。元結は、こうした官吏を「規検大夫持規之徒」（「漫論」

と称する。彼はその一員としてではなく、安史の乱と西原の賊の侵入によって疲弊した道州の人々の苦しみ思い、民生を安んじることが第一とする刺史として道州に臨んだ。規則通りに刑法を加えることを辞さぬ官吏とは異なる者として自らを位置づけたのである。自己表出の営みには、「荒浪なる者」の視座が必要であった。

漫叟は、道州の人々の窮状を描き、刺史としての自らの立場と意識を述べ、それを天子に伝えるべく、采詩の官に献上しようとした。采詩の官については、『漢書』「芸文志」に「書曰、詩言志、歌詠言。故哀樂之心感、而歌詠之声發。誦其言謂之詩、詠其声謂之歌。故古有采詩之官、王者所以觀風俗、知得失、自考正也。書に曰はく、詩は志を言ひ、歌は言を詠ず、と。故に哀樂の心感きて、歌詠の声發す。其の言を誦すれば之を詩と謂ひ、其の声を詠すれば之を歌と謂ふ。故に古に采詩の官有り、王者風俗を觀、得失を知り、自ら考正する所以なり。」とあり、また「食貨志」には「行人振木鐸徇于路、以采詩、獻之大師、比其音律、以聞於天子。故曰、王者不窺牖戸而知天下。行人木鐸を振りて路に徇へて、以て詩を采り、之を大師に獻じ、其の音律を比べて、以て天子に聞す。故に曰はく、王者は牖戸を窺はずして天下を知る、と。」とある。元結はこうした采詩の構造において自らを表現者漫叟として位置づけており、決して自らを采詩の官の位置に置くことはなかった。

これに対して白居易は、「新樂府」五十八首「采詩官」において、采詩の官がおかれていない故に、諫官である左拾遺の自らが下情を伝える樂府を制作し、上覧に供することを言っている。『大唐六典』に「左補闕拾遺、掌供奉諷諫、扈從乘輿。凡發令舉事、有不便於時、不合於道、大則廷議、小則上封。若賢良之遺滞於下、忠孝之不聞於上、則條其事狀而薦言之。」（左補闕拾遺は、供奉諷諫を掌り、乘輿に扈從す。凡そ令を發し事を擧ぐるに、時に便ならず、道に合はざる有れば、大なるは則ち廷議し、小なるは則ち上封す。若し賢良の下に遺滞し、忠孝の上に聞せざれば、則ち其の事狀を條して之を薦言す。）とある。諫官が名ばかりのものとなっている時代にあつて、この左拾遺の職掌である諷諫の役割を新樂府において実現しようとしているのである。

体制の外側にある表現者として自らを位置づけるか、左拾遺という諫官として位置づけるか、両者の視座は明確に異なる。このことは両者の諷諭についての認識にも関わっている。

元結が諷諭をどのように捉えていたかは、拙論においてすでに論じたが、彼にとつ

て諷諭は、「不能救時患、諷諭以全意（時患を救ふ能はずんば、諷諭して以て意を全くす）」（酬孟武昌苦雪）というように、時代の持つさまざまな悪しき状況を救うてだてのない者が、自らの意、兼済の志を全うする、いわば自己実現の手段であった。

一方の白居易にあつては、諷諭は、「時患」を救う立場にある者が兼済の志を全うする手段であつた。その「与元九書」には「僕当此日、擢在翰林、身是諫官。手請諫紙、啓奏之外、有可以救濟人病、裨補時闕、而難於指言者、輒詠歌之。（僕此の日に当たって、擢せられて翰林に在り、身は是れ諫官たり。手に諫紙を請ひ、啓奏の外、以て人病を救済し、時闕を裨補すべきも、指言に難き者有れば、輒ち之を詠歌す。）」と明確に述べられている。下定雅弘氏は「諷諭詩は、基本的に諫官時代の産物である。江州時代にも幾らかあるが、それは、諫官時代の活躍を訴えるための恨み節のようなもので、忠州時代にはまったく消滅している。諫官時代の特殊な時期の産物と見るのが現実になつていく。」と述べている。下定氏の指摘の通り、白居易の諷諭詩は諫官と分かちがたく結びついており、その場が失われたところに諷諭詩はなかつたとしてよいであろう。両者の諷諭の文学観には大きな本質的隔たりがあるのである。

四、おわりに

これまでの元結研究においては、白居易等による中唐の新樂府運動の先駆者として元結を位置づけることが多い。しかし、新樂府について検討すると、元結と白居易の諷諭の文学には、やはり大きな差異が見られる。

「系樂府十二首」は、『毛詩』大序の文学観、そして漢代の文学観を具現化したものであり、白居易の新樂府と構造を一にしている。しかし、元結の場合は、歎怨の情を極めて為政者を感じさせることを重視し、天子に作品が嘉納され、幸福な邂逅がかなうことを願うという自己実現の構造を読み取ることができる。

「春陵行」は、元結の視座から表現されるのではなく、漫叟の視座から語られている。元結は、民生を憂えることを知らず、国家のために黎民に刑法を施して税を徴収する官吏を否定し、その一員としてではなく、州民の苦しみ思い、民生を安んじる刺史として道州に臨んだ。規則通りに刑法を加えることを辞さぬ官吏と異なる者として自らを位置づけるには、「荒浪なる者」の視座が必要であつた。漫叟とい

う号の使用は、このように解釈できるであろう。

漫叟は、采詩の官に「春陵行」を献上しようと言っている。それは、白居易が、諫官が名ばかりのものでしかなかった時代において、左拾遺の職掌である諷諫の役割を新樂府において実現しようとしているとは全く異なっている。

元結は、時代の持つさまざまな悪しき状況を救うてだてのない者が、詩歌に表現することによって、兼済の志を表現の場において全うする、いわば表現による自己実現の手段として諷諭を位置づけていた。一方、白居易にとっては、諫官という「時患」を救う位置にある者が兼済の志を全うする手段であった。諷諭の意識においても両者は異なるのである。

元結においては、諷諭はその文学の根幹に位置し、晩年における記録の作においても諷諭の精神が横溢している。諷諭の営みをとおして自己が省察されて確認され、自己実現がなされ、不遇な状況のうちにあっても癒されてゆくというのが、元結における諷諭の文学なのであった。

注

- 1 鈴木修次著『唐代詩人論 下』『柳宗元論』（鳳出版 一九七三）一七〇—一七一頁。
- 2 孫望著『蝸叟雜稿』『元結評伝』（上海古籍出版社 一九八二）一三七—一三八頁。
- 3 陶文鵬氏『元結和《篋中集》』（中国社会科学院『唐代文学史』所載 人民文学出版社 一九九五）。
- 4 小川環樹氏『中国詩人選集第一集 一二『白居易』の「跋」（岩波書店 一九五八）。
- 5 前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会 一九七五）一一頁。
- 6 聶文郁著『元結詩解』（陝西人民出版社 一九八四）一二三頁。
- 7 皮日休の「正樂府十篇」が元結の「系樂府十二首」の影響のもとに制作されたものであること、および「正樂府」の特色については、増田清秀著『樂府の歴史的研究』（創文社 一九七五）に詳細な論考がある。また、単書安「『正樂府』仿『系樂府』浅説」（『江海学刊』一九八九）、曾進豊「皮日休〈正樂府十篇〉析論」（『師大報』四六 二〇〇一）がある。

8 増田清秀氏、同書。

9 増田清秀氏、同書。

10 王克讓著『河岳英靈集注』（巴蜀書社 二〇〇六）一一八頁。王克讓氏は「秘芸、未詳。芸、俱作雲、《唐詩紀事》《全唐詩》作秋雲曙。似当從。」と述べている。

11 傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』（陝西人民出版社 一九九六）一四一頁。傅璇琮氏は、「按題為贈秘書山兄，唐人習稱秘書省為芸書，此處似以芸為是。」と述べている。

12 王克讓氏、同書。

13 伊藤正文著『建安詩人とその伝統』第三編、第四章「杜甫と元結・『篋中集』の詩人達」（創文社 二〇〇二）三九八頁。

14 拙稿「元結の文学——『系樂府』と『篋中集』」（『千葉大学教育学部研究紀要』第五三卷 二〇〇五）。

15 拙稿「元結の初期詩編について」（大久保隆郎教授退官紀念論集刊行会『大久保隆郎教授退官紀念論集 漢意とは何か』東方書店 二〇〇一）。

16 『資治通鑑』には、「時命三百里内刺史県令、各帥所部音楽集於楼下、各較勝負。（時に三百里内の刺史県令に命じ、各所部の音楽を帥めて楼下に集まり、各勝負を較せしむ。）とある。これによれば、玄宗も余興としての歌競べの場として捉えていたことになる。

17 李華「元魯山墓碣銘并序」では「于薦」を「于薦于」に作る。

18 拙稿「元結の『春陵行』と『賊退示官吏』について」（『千葉大学教育学部研究紀要』第四五卷 一九九七）。

19 拙稿「元結における『漫叟』の視座について」（『千葉大学教育学部研究紀要』第五七卷 二〇〇九）。

20 元結の諷諭の特色については、拙稿「元結の文学——『系樂府』と『篋中集』」（『千葉大学教育学部研究紀要』第五三卷 二〇〇五）、「元結の詩文における語溪と『大唐中興頌』」（『中国文化』第六五号 二〇〇七）において論じた。

21 下定雅弘著『白氏文集を読む』（勉誠社 一九九六）一五五頁。